

全国「まちの保健室」フォーラムが 開催される

各地の取り組みを共有、新たな可能性を探る

「第2回全国『まちの保健室』フォーラム」が1月29日（日）、梅田阪急ビルオフィスタワー（大阪府大阪市）にて開催された（主催：よどきり医療と介護のまちづくり株式会社）。同フォーラムには全国の保健室活動に関わる約100人が集まり、各保健室の個性的な取り組みを共有した。

暮らしの保健室の実態調査が進行中

まず、実際に保健室を運営する登壇者に先立ち、久保田千代美氏（大阪教育大学大学院）が現在進めている全国各地の



フォーラムの様子。

「暮らしの保健室」の実態調査について解説した。氏のインターネットでの調査によると、現在「保健室」という名を冠して活動するものは、「まちの保健室」（日本看護協会が推進してきた事業）、「暮らしの保健室」で全国総計390か所あるという。内訳は344か所が「まちの保健室」、46か所が「暮らしの保健室」で、46か所の暮らしの保健室のうち、常設型38か所、不定期・移動型8か所と報告した。インタビュー調査を通し、暮らしの保健室の多様性を実感していると久保田氏。〈「今後も調査を進めたい」と語った。

個性豊かな保健室の活動

実践報告でマイクをとったのは以下9か所。保健室開設のエピソード、地域に応じた活動内容、運営上の課題や資金繰り、利用住民の声などが紹介された（司会：医療ジャーナリスト・村上紀美子氏、福岡県立大学・杉本みぎわ氏）。

①秋田大学附属病院の敷地内で運営する「おらほの暮らしの保健室in秋田大学」（秋田県秋田市）、②在宅医療を担うオンラインホームケアクリニックが母体の「みんなの保健室」（福井県福井市、本誌p288参照）、③一般社団法人もりおかナ

ラティブ勉強会という有志団体がスタートさせた「暮らしの保健室もりおか」（岩手県盛岡市）、④佐久総合病院地域ケア科の「地域の保健室『はぐみ』」（長野県佐久市）、⑤地域の資源を上手につなぐ「暮らしの保健室かなで」（東京都江戸川区）、⑥Uターンの若手訪問看護師が取り組む「暮らしの保健室」（島根県雲南市）、⑦地域に開かれた賃貸住宅に開設された「荻窪暮らしの保健室」（東京都杉並区）、⑧空き家を活用した「暮らしの保健室in若松 こみねこハウス」（福岡県北九州市、本誌p270参照）、⑨第三セクターがボランティアで運営する「暮らしの保健室 さくらい」（奈良県桜井市）。

このほか、石井富美氏（よどきり医療と介護のまちづくり株式会社取締役）が「よどまち保健室」（大阪府東淀川区、本誌p276参照）の活動を、また、秋山正子氏（白十字訪問看護ステーション統括所長）が「マギーズ東京」（東京都江東区）と「暮らしの保健室」（東京都新宿区、本誌p288参照）の「環境へのこだわり」「相談支援のあり様」を紹介した。

「暮らしの保健室」には定義を設けないとしつつも、「互いの保健室が緩やかにつながることで、実践を共有し、よりよいものになりたい」と秋山氏。今回のフォーラムは2018年2月12日（月・祝）、東京都内での開催が予定されている。